

高齢者世帯の老親扶養に関する一考察

—中高齢者単身・夫婦世帯のデータを中心として—

菊池 真弓

(いわき明星大学)

A Study of Support for Dependant Aged Parents in Aged Household

Mayumi Kikuchi

要 約

本稿では、高齢者単身・夫婦世帯に関する老親扶養をとりあげ、彼らがどのような情緒的サポート・経済的サポート・身辺看護・身辺介護と援助源を必要としているのかを、日本家族社会学会が実施した全国家族調査のうち53歳～77歳を対象に、それらの結果に基づいた分析・考察するとともに、今後の研究課題を提示することを目的とする。

これらの結果から、高齢者単身・夫婦世帯に関する老親扶養の特徴をまとめてみると、高齢者単身世帯の場合は「子ども・その配偶者」、高齢者夫婦世帯の場合は「配偶者」を第1に援助源として選択している。

今後は、それぞれの高齢者の老親扶養の実態を明らかにするとともに、住環境整備や公的な年金、介護保険、社会的なサポートシステム化などを身近な地域社会を拠点とした地域活動から総合的に検討して行く必要がある。

キーワード：単身高齢者・高齢者夫婦、老親扶養、高齢者福祉

はじめに

わが国の65歳以上の老年人口割合は、16.7%（1999年10月1日現在）に達し、高齢化社会から高齢社会へ突入している。特に、75歳以上の後期高齢者の増加は顕著である。このような動向をスウェーデンやフランス等の福祉先進国と比較すると、日本の高齢化のスピードは非常に速く、なおかつ老年人口割合が将来世界の中でも最も高い水準に到達すると予測されている⁽¹⁾。

さらに、今後のわが国の世帯構成の変化を、国立社会保障・人口問題研究所の「日本の世帯数の将来推計」（平成10年10月推計）で見ると、比較的若い年齢層における単独世帯の増加と高齢者夫婦世帯（空の巣家族=empty nest）並びに単独世帯（特に高齢女性）の増加によって、世帯規模が非常に小さくなっていることが窺える⁽²⁾。このような人口学的な動向は、現代家族における子どもと別居しながら夫婦だけで生活する高齢者夫婦世帯や、未婚または配偶者の離死別により単身生活を送る高齢者単身世帯の高齢者問題を浮き彫りにしているとともに、こうした高齢者世帯に注目した研究の必要性も示唆している。

1. 先行研究の位置づけと高齢者単身・夫婦世帯の動向

(1) 老親扶養に関する研究と位置づけ

現代家族における高齢者問題は、老親扶養や高齢期における夫婦・親子関係のあり方などに議論が集中している⁽³⁾。それは、老親が価値観や生活スタイルの異なる子どもや孫等と一緒に生活する高齢者同居世帯、子どもと別居しながら夫婦だけで生活する高齢者夫婦世帯（空の巣家族＝empty nest）や、さらに夫との死別や離別から多くの経済的、身体的、情緒的援助を必要としている単身高齢女性等、様々な形態が存在しているからである。

このような状況を踏まえて、老親扶養に関する研究をみると、同居を中心とした老親扶養の研究（小山，1977年）、老親扶養をめぐる家族病理学的な研究（那須，1970年・1972年）、高齢者の欲求構造と扶養との関係を図式化した研究（森岡，1997年）などの代表的な研究がある。例えば、森岡によれば、高齢者の「経済欲求は同居子孫の家計のなかで満たされ、身体欲求は同居子孫の介護によって対処され、関係欲求は同居子孫との日常的接触のなかで充足された。価値欲求も、家業あるいは家事の責任ある地位から引退したにせよ、なおそれらの補助的もしくは後見的役割を担当することにより、満たされた。」としている。また、「敗戦による伝統的価値の解体と戦後の制度変革は、老親扶養の社会規範を著しく弱め、経済成長に伴う労働力移動は、親の扶養に責任があるはずの子の離家をも促した。加えて、大幅な寿命の伸びは長く生き残る高齢者をふやし、出生児数の格段の減少とあいまって、高年人口比の急速な上昇をもたらした。かくて高齢社会が到来し、いまや老親の扶養が大きな社会問題となっている」⁽⁴⁾ ことも指摘している。

(2) 高齢者単身・夫婦世帯の動向と老親扶養

最近のわが国における高齢者福祉の動向をみると、介護保険制度の開始、年金制度の見直しなどの社会保障制度の抜本的な改革が進められている⁽⁵⁾。その一方で、単独・夫婦のみの形態をとりながら家族と距離を置いた生活を送っている単身高齢者や高齢者夫婦の経済的自立の困難化、要介護化、孤独死などの問題も、今後解決しなければならない課題であると考えられる。

こうした状況のなかで、単身高齢者や高齢者夫婦にとって子ども、きょうだい、親戚、友人・知人、近隣の人々などは、物質的・精神的な生活援助の資源である。また、彼らがそうした日々の暮らしのなかで、どのような生活問題を抱えているかについて把握することは重要な研究課題である。しかしながら、特に単身高齢者や高齢者夫婦に関する老親扶養の研究は、今日まで必ずしも十分に展開されてきたとはいえないように思われる。

そこで、本稿では、これまであまり注目されなかった高齢者単身・夫婦世帯に関する老

親扶養をとりあげ、彼らがどのような情緒的・経済的・身体的な欲求を抱えて、その欲求に対して、いかなる情緒的サポート・経済的サポート・身辺看護・身辺介護と援助源を必要としているのかを、日本家族社会学会が実施した全国家族調査のうち53歳～77歳を対象に、それらの結果に基づいた分析・考察するとともに、今後の研究課題を提示することにしたい。

2. 研究の方法

本研究は、日本家族社会学会が実施した「全国家族調査」（1998年）に基づき、わが国における高齢者単身・夫婦世帯の老親扶養の特徴と課題について分析を試みた。

また、本稿では、高齢者単身・夫婦世帯の老親扶養構造を明らかにするために、以下の調査票問30「あなたは、次の（ア）～（エ）のような問題で援助や相談相手がほしいとき、どのような人や機関を頼りにしますか。それぞれの場合について、あてはまるものに○をつけてください。（○はいくつでも）」の質問肢と選択肢を用いることとする。

質問肢：（ア）「問題を抱えて、落ち込んだり、混乱したとき」

（イ）「急いでお金（30万円程度）を借りなければならないとき」

（ウ）「病気や事故で、どうしても人手が必要なとき」

（エ）「あなたが寝たきりなどで、介護が必要とすようになったとき」

選択肢：「配偶者」、「親・兄弟姉妹」、「子ども・その配偶者」、「その他の親族」、「友人や職場の同僚」、「近所（地域）の人」、「専門家やサービス機関」、「誰もいない」

さらに、以下の分析では、次のような指標に基づいて、（ア）～（エ）のサポートが必要になったとき、どのような援助源を選択するかを明らかにする。そして、中高年齢者と高齢者のコーホートによる意識の相違を比較しながら、今後の高齢者単身・夫婦世帯に対する老親扶養の特徴とその課題を明らかにする。

サポート：（ア）「情緒的サポート」、（イ）「経済的サポート」、

（ウ）「身辺看護」、（エ）「身辺介護」

コーホート：中高年齢者（「53～57歳」、「58～62歳」）

高齢者（「63歳～67歳」、「68～72歳」、「73歳～77歳」）

世帯類型：「単身世帯」、「夫婦世帯」

3. 性別・コーホートにおける老親扶養構造の特徴

ここでは、まず性別による援助源の特徴を明らかにするために、(ア)～(エ)のような問題が生じたとき、どのような援助源を選択するかについて、 χ^2 検定を基に分析を試みることとする。また、性差に加えて、中高年齢者と高齢者のコーホートを比較しながら、援助源の特徴を明らかにするとともに、それらの分析結果から、それぞれの考察を加えてみる【表1～表5参照】。

(1) 情緒的サポートの援助源についての結果と考察

(ア) 「問題を抱えて、落ち込んだり、混乱したとき」(以下、「情緒的サポート」とする)のそれぞれの援助源について全体的に概観すると、男性の場合「配偶者」(71.7%)、「子ども・その配偶者」(23.0%)、「親・兄弟姉妹」(18.7%)、女性の場合「配偶者」(55.3%)、「子ども・その配偶者」(39.6%)、「親・兄弟姉妹」(26.2%)等の援助源を有選択する中高年齢者が多い傾向を示している【表1参照】。

次に、 χ^2 検定の結果から男女それぞれについてのコーホートとの関連性を検討すると、男性の場合「親・兄弟姉妹」、「子ども・その配偶者」、「友人や職場の同僚」の援助源に、女性の場合「配偶者」、「親・兄弟姉妹」、「子ども・その配偶者」、「その他の親族」、「友人や職場の同僚」、「近所(地域)の人」、「誰もいない」と多数の援助源に有意差が認められた。

さらに、0.1%水準を中心に分析を加えてみると、男性の情緒的サポートについては、「53歳～57歳」(5.9%)、「58～62歳」(4.3%)、「63～67歳」(3.7%)、「68～72歳」(3.2%)、「73～77歳」(1.5%)と高齢者コーホートになるほど「親・兄弟姉妹」を選択する割合が低くなっている。また、高齢者コーホートの「68～72歳」(6.9%)では、「子ども・その配偶者」、中高年齢者コーホートの「53歳～57歳」(5.0%)では、「友人や職場の同僚」を選択する割合がそれぞれ最も高くなっている。一方、女性の情緒的サポートについて、コーホート別の分析を加えてみると、「53歳～57歳」(15.1%)、「58～62歳」(13.4%)、「63～67歳」(12.2%)、「68～72歳」(9.2%)、「73～77歳」(5.5%)と高齢者コーホートになるほど「配偶者」を選択する割合が低くなっている。同様に、「53～57歳」(8.2%)、「58～62歳」(6.1%)、「63歳～67歳」(5.5%)、「68～72歳」(3.9%)、「73～77歳」(2.5%)と高齢者コーホートになるほど「親・兄弟姉妹」を選択する割合が低くなっている。また、高齢者コーホートの「73～77歳」(8.8%)では、「子ども・その配偶者」、中高年齢者コーホートの「53歳～57歳」(5.8%)では、「友人や職場の同僚」を選択する割合がそれぞれ最も高くなっている。

これらの結果から、情緒的サポートの援助源の特徴をまとめてみると、「配偶者」は男性7割、女性6割、「子ども・その配偶者」は男性2割、女性4割といったように、男性

の場合は、配偶者依存の傾向を示し、女性の場合は、子ども依存の傾向が読みとることができる【表5参照】。 χ^2 検定の結果から性別・コーホートとの関連性の特徴をまとめてみると、男性の情緒的サポートについては、中高年者コーホートから高齢者コーホートへ移行するにつれて「親・兄弟姉妹」を選択する割合が低くなり、一方で「子ども・その配偶者」を選択する割合が高くなっている。また、女性の場合は、中高年齢者コーホートから高齢者コーホートへ移行するにつれて「配偶者」、「親・兄弟姉妹」を選択する割合が低くなり、一方で「子ども・その配偶者」を選択する割合が高くなっている。

以上の結果から考察を加えてみると、男性の大半は、配偶者を情緒的サポートの援助源と考えており、加齢に伴い子ども家族を情緒的サポートの援助源として位置付けるようになる。一方、女性の場合は、加齢に伴い配偶者から子ども家族へ援助源が移行していることから、配偶者との死別をきっかけに情緒的サポートの援助源が子ども家族へ移行することが窺える。

(2) 経済的サポートの援助源についての結果と考察

(イ) 「急いでお金(30万円程度)を借りなければならないとき」(以下、「経済的サポート」とする)のそれぞれの援助源について全体的に概観すると、男性の場合「配偶者」(44.2%)、「子ども・その配偶者」(26.6%)、「親・兄弟姉妹」(22.3%)、女性の場合「配偶者」(42.1%)、「子ども・その配偶者」(37.0%)、「親・兄弟姉妹」(20.9%)等の援助源を有選択する中高年齢者が多い傾向を示している【表2参照】。

次に、 χ^2 検定の結果から男女それぞれについてのコーホートとの関連性を検討すると、男性の場合「配偶者」、「親・兄弟姉妹」、「子ども・その配偶者」、「友人や職場の同僚」、「専門家やサービス機関」、「誰もいない」と多数の援助源に、女性の場合「配偶者」、「親・兄弟姉妹」、「子ども・その配偶者」、「専門家やサービス機関」の援助源に有意差が認められた。

さらに、0.1%水準を中心に分析を加えてみると、男性の経済的サポートについては、「53歳～57歳」(6.8%)、「58～62歳」(5.9%)、「63～67歳」(4.3%)、「68～72歳」(3.3%)、「73～77歳」(2.0%)と高齢者コーホートになるほど「親・兄弟姉妹」を選択する割合が低くなり、同様に「53～57歳」(5.4%)、「58～62歳」(4.2%)、「63歳～67歳」(3.3%)、「68～72歳」(3.2%)、「73～77歳」(1.2%)と高齢者コーホートになるほど「専門家やサービス機関」を選択する割合が低くなっている。また、高齢者コーホートの「63～67歳」(6.1%)、「68歳～72歳」(8.4%)では、「子ども・その配偶者」を選択する割合が高い傾向を示している。一方、女性の経済的サポートでは、「配偶者」、「親・兄弟姉妹」、「子ども・その配偶者」の援助源に有意差が認められた。それぞれのコーホート別の分析を加えてみると、「配偶者」の場合は、「53歳～57歳」

(11.1%)、「58～62歳」(9.9%)、「63～67歳」(9.9%)、「68～72歳」(7.4%)、「73～77歳」(3.8%)、「親・兄弟姉妹」の場合は、「53～57歳」(8.1%)、「58～62歳」(5.2%)、「63歳～67歳」(3.6%)、「68～72歳」(2.6%)、「73～77歳」(1.5%)と高齢者コーホートになるほどそれぞれの援助源を選択する割合が低くなっている。また、「子ども・その配偶者」の場合は、「53～57歳」(6.9%)、「58～62歳」(6.4%)、「63歳～67歳」(7.3%)、「68～72歳」(7.8%)、「73～77歳」(8.5%)と高齢者コーホートになるほどそれぞれの援助源を選択する割合が高くなっている。

これらの結果から、経済的サポートの援助源の特徴をまとめてみると、「配偶者」は男女ともに約4割、「子ども・その配偶者」は男性3割、女性4割、「親・兄弟姉妹」は男女ともに2割といったように、女性の方が男性より若干子どもを頼りにする傾向が読みとれる程度であり男女差はみられない【表5参照】。 χ^2 検定の結果から性別・コーホートとの関連性の特徴をまとめてみると、男性の経済的サポートについては、中高年齢者コーホートから高齢者コーホートへ移行するにつれて「親・兄弟姉妹」、「専門家やサービス機関」を選択する割合が低くなり、一方で「子ども・その配偶者」を選択する割合が高くなる傾向を示している。また、女性の場合は、中高年齢者コーホートから高齢者コーホートへ移行するにつれて「配偶者」、「親・兄弟姉妹」を選択する割合が低くなり、一方で「子ども・その配偶者」を選択する割合が高くなっている。

以上の結果から考察を加えてみると、男女ともに、配偶者や子ども家族を経済的サポートの援助源として位置付けている。しかし、女性の場合は、加齢に伴い配偶者から子ども家族へ移行していることから、配偶者の死別後の経済的サポートの援助源が子ども家族であることが窺える。

(3) 身近看護の援助源についての結果と考察

(ウ)「病気や事故で、どうしても人手が必要なとき」(以下、「身近看護」とする)のそれぞれの援助源について全体的に概観すると、男性の場合「配偶者」(59.5%)、「子ども・その配偶者」(46.0%)、「親・兄弟姉妹」(25.3%)、女性の場合「子ども・その配偶者」(60.1%)、「配偶者」(36.3%)、「親・兄弟姉妹」(25.9%)等の援助源を有選択する中高年齢者が多い傾向を示している【表3参照】。

次に、 χ^2 検定の結果から男女それぞれについてのコーホートとの関連性を検討すると、男性の場合「配偶者」、「親・兄弟姉妹」、「子ども・その配偶者」、「友人や職場の同僚」の援助源に、女性の場合「配偶者」、「親・兄弟姉妹」、「子ども・その配偶者」、「友人や職場の同僚」の援助源に有意差が認められた。

さらに、0.1%水準を中心に分析を加えてみると、男性の身近看護については、「53歳～57歳」(8.6%)、「58～62歳」(6.8%)、「63～67歳」(4.6%)、「68～72歳」(3.5

%)、「73～77歳」(1.9%)と高齢者コーホートになるほど「親・兄弟姉妹」を選択する割合が低くなっている。また、高齢者コーホートの「63～67歳」(10.3%)、「68～72歳」(11.1%)では、「子ども・その配偶者」、中高年齢者コーホートの「53歳～57歳」(1.9%)では、「友人や職場の同僚」を選択する割合がそれぞれ最も高くなっている。一方、女性の身辺看護では、「配偶者」、「親・兄弟姉妹」、「子ども・その配偶者」、「友人や職場の同僚」の援助源に有意差が認められた。それぞれのコーホート別の分析を加えてみると、「配偶者」の場合は、「53歳～57歳」(11.3%)、「58～62歳」(8.9%)、「63～67歳」(7.7%)、「68～72歳」(5.4%)、「73～77歳」(3.0%)、「親・兄弟姉妹」の場合は、「53～57歳」(9.2%)、「58～62歳」(6.5%)、「63歳～67歳」(4.8%)、「68～72歳」(3.5%)、「73～77歳」(2.0%)、「友人や職場の同僚」の場合は、「53～57歳」(2.7%)、「58～62歳」(1.2%)、「63歳～67歳」(0.4%)、「68～72歳」(0.5%)、「73～77歳」(0.2%)と高齢者コーホートになるほどそれぞれの援助源を選択する割合が低くなっている。また、高齢者コーホートの「63歳～67歳」(12.1%)、「68～72歳」(12.4%)では、「子ども・その配偶者」を選択する割合が徐々に高くなる傾向を示している。

これらの結果から、身辺看護の援助源の特徴をまとめてみると、「配偶者」は男性6割、女性4割、「子ども・その配偶者」は男性5割、女性6割、「親・兄弟姉妹」は男女ともに3割といったように、男女ともに「配偶者」、「子ども・その配偶者」を身辺看護の援助源として選択する割合が高くなっているが、男性の方にやや配偶者依存の傾向が読みとれる【表5参照】。 χ^2 検定の結果から性別・コーホートとの関連性の特徴を検討すると、男性の身辺看護については、中高年齢者コーホートから高齢者コーホートへ移行するにつれて「親・兄弟姉妹」を選択する割合が低くなり、一方で「子ども・その配偶者」を選択する割合が高くなっている。また、女性の身辺看護については、「配偶者」、「親・兄弟姉妹」、「友人や職場の同僚」が中高年齢者コーホートから高齢者コーホートへ移行するにつれて、それぞれの援助源を選択する割合が低くなり、一方「子ども・その配偶者」を選択する割合が徐々に高くなる。

以上の結果から考察を加えてみると、男女ともに配偶者や子ども家族が多数を占めているけれども、約3割が親・兄弟姉妹を身辺看護の援助源として位置付けている。しかし、男女とも加齢に伴い配偶者、親・兄弟姉妹等から子ども家族へと援助源が移行していることから、高齢者が高齢者を看護することの難しさが窺える。

(4) 身辺介護の援助源についての結果と考察

(エ) 「あなたが寝たきりなどで、介護が必要とするようになったとき」(以下、「身辺介護」とする)のそれぞれの援助源について全体的に概観すると、男性の場合「配偶

者」(70.5%)、「子ども・その配偶者」(38.7%)、「専門家やサービス機関」(21.6%)、「親・兄弟姉妹」(10.2%)、女性の場合「子ども・その配偶者」(58.7%)、「配偶者」(40.8%)、「専門家やサービス機関」(29.8%)、「親・兄弟姉妹」(13.3%)等の援助源を有選択する中高年齢者が多い傾向を示している【表4参照】。

次に、 χ^2 検定の結果から男女それぞれについてのコーホートとの関連性を検討すると、男性の場合「子ども・その配偶者」の援助源に、女性の場合「配偶者」、「親・兄弟姉妹」、「子ども・その配偶者」、「その他の親族」の援助源に有意差が認められた。

さらに、0.1%水準を中心に分析を加えてみると、男性の身辺介護については、「子ども・その配偶者」を選択する割合が高年齢者コーホートの「68歳～72歳」(8.8%)で最も高くなっている。一方、女性の身辺介護では、「配偶者」、「親・兄弟姉妹」、「子ども・その配偶者」の援助源に有意差が認められた。それぞれのコーホート別の分析を加えてみると、「配偶者」の場合は、「53歳～57歳」(12.7%)、「58～62歳」(10.1%)、「63～67歳」(8.7%)、「68～72歳」(6.2%)、「73～77歳」(3.1%)、「親・兄弟姉妹」の場合は、「53～57歳」(4.4%)、「58～62歳」(3.7%)、「63歳～67歳」(2.4%)、「68～72歳」(1.5%)、「73～77歳」(1.3%)と高年齢者コーホートになるほどそれぞれの援助源を選択する割合が低くなっている。また、中高年齢者コーホートの「53歳～57歳」(13.7%)では、「子ども・その配偶者」を選択する割合が最も高くなっている。

これらの結果から、身辺介護の援助源の特徴をまとめてみると、「配偶者」は男性7割、女性4割、「子ども・その配偶者」は男性4割、女性6割、「専門家やサービス機関」は男性2割、女性3割といったように、男女ともに「配偶者」、「子ども・その配偶者」を選択する割合が高くなっているが、男性の場合は配偶者依存の傾向を示し、女性の場合は子ども依存の傾向が読みとれる【表5参照】。 χ^2 検定の結果から性別・コーホートとの関連性の特徴をまとめてみると、男性の身辺介護については、「子ども・その配偶者」が高年齢者コーホートで高くなっている。また、女性の場合は、「配偶者」、「親・兄弟姉妹」は、中高年齢者コーホートから高年齢者コーホートへ移行するにつれて、それぞれの援助源を選択する割合が低くなり、一方で「子ども・その配偶者」を選択する割合が高くなっている。

以上の結果から考察を加えてみると、男女ともに配偶者や子ども家族を身辺介護の援助源として位置付けている。しかし、男性の場合は、加齢に伴い配偶者依存から子ども家族へと援助源が移行し、女性の場合は、加齢に伴い配偶者から子ども家族へ、さらに配偶者の死別後、子ども家族依存へと援助源が移行している。また、身辺看護以上に高年齢者が高年齢者を介護することが困難になる状況であることが窺える。

表4 身辺介護 (エ)あなたが寝たきりなどで、介護を必要とするようになったとき

		*** **		** **		* **		* **		* **		* **		* **				
		配偶者	親・兄弟姉妹	子ども・その配偶者	その他の親族	友人や職場の同僚	近所(地域)の人	専門家やサービス機関	誰もいない									
男性	年齢 53-57歳 度数	103	251	310	44	223	131	343	11	349	5	344	10	267	87	335	19	
		年齢(%)	6.8%	16.6%	20.6%	2.9%	14.8%	8.7%	22.8%	0.7%	23.1%	0.3%	22.8%	0.7%	17.7%	5.8%	22.2%	1.3%
	刻み) 58-62歳 度数	87	240	294	33	226	101	317	10	322	5	325	2	258	69	317	10	
		年齢(%)	5.8%	15.9%	19.5%	2.2%	15.0%	6.7%	21.0%	0.7%	21.4%	0.3%	21.6%	0.1%	17.1%	4.6%	21.0%	0.7%
	63-67歳 度数	103	219	293	29	195	127	315	7	321	1	319	3	261	61	309	13	
		年齢(%)	6.8%	14.5%	19.4%	1.9%	12.9%	8.4%	20.9%	0.5%	21.3%	0.1%	21.2%	0.2%	17.3%	4.1%	20.5%	0.9%
	68-72歳 度数	86	227	288	25	180	133	303	10	311	2	304	9	243	70	301	12	
		年齢(%)	5.7%	15.1%	19.1%	1.7%	11.9%	8.8%	20.1%	0.7%	20.6%	0.1%	20.2%	0.6%	16.1%	4.6%	20.0%	0.8%
	73-77歳 度数	66	126	170	22	100	92	187	5	191	1	190	2	153	39	184	8	
		年齢(%)	4.4%	8.4%	11.3%	1.5%	6.6%	6.1%	12.4%	0.3%	12.7%	0.1%	12.6%	0.1%	10.2%	2.6%	12.2%	0.5%
	合計	度数	445	1063	1355	153	924	584	1465	43	1494	14	1482	26	1182	326	1446	62
		年齢(%)	29.5%	70.5%	89.9%	10.2%	61.3%	38.7%	97.2%	2.9%	99.1%	0.9%	98.3%	1.7%	78.4%	21.6%	95.9%	4.1%
女性	年齢 53-57歳 度数	201	215	342	74	185	231	401	15	409	7	408	8	282	134	400	16	
		年齢(%)	11.9%	12.7%	20.3%	4.4%	11.0%	13.7%	23.8%	0.9%	24.2%	0.4%	24.2%	0.5%	16.7%	7.9%	23.7%	1.0%
	刻み) 58-62歳 度数	180	170	287	63	160	190	343	7	343	7	346	4	250	100	339	12	
		年齢(%)	10.7%	10.1%	17.0%	3.7%	9.5%	11.3%	20.3%	0.4%	20.3%	0.4%	20.5%	0.2%	14.8%	5.9%	20.0%	0.7%
	63-67歳 度数	193	147	300	40	147	193	335	5	336	4	335	5	242	98	334	6	
		年齢(%)	11.4%	8.7%	17.8%	2.4%	8.7%	11.4%	19.9%	0.3%	19.9%	0.2%	19.9%	0.3%	14.3%	5.8%	19.8%	0.4%
	68-72歳 度数	214	105	293	26	129	190	314	5	315	4	311	8	217	102	304	15	
		年齢(%)	12.7%	6.2%	17.4%	1.5%	7.7%	11.3%	18.6%	0.3%	18.7%	0.2%	18.4%	0.5%	12.9%	6.1%	18.0%	0.9%
	73-77歳 度数	210	52	240	22	75	187	249	13	260	2	259	3	193	69	254	8	
		年齢(%)	12.5%	3.1%	14.2%	1.3%	4.5%	11.1%	14.8%	0.8%	15.4%	0.1%	15.4%	0.2%	11.4%	4.1%	15.1%	0.5%
	合計	度数	998	689	1462	225	696	991	1642	45	1663	24	1659	28	1184	503	1630	57
		年齢(%)	59.2%	40.8%	86.7%	13.3%	41.3%	58.7%	97.3%	2.7%	98.6%	1.4%	98.3%	1.7%	70.2%	29.8%	96.6%	3.4%

注) χ²検定結果→ **p<0.05, ***p<0.01, ****p<0.001

表5 中高年齢者のサポートと援助源

項目	男性・援助源	割合	女性・援助源	割合
情緒的サポート	① 配偶者	71.7%	① 配偶者	55.3%
	② 子ども・その配偶者	23.0%	② 子ども・その配偶者	39.6%
	③ 親・兄弟姉妹	18.7%	③ 親・兄弟姉妹	26.2%
経済的サポート	① 配偶者	44.2%	① 配偶者	42.1%
	② 子ども・その配偶者	26.6%	② 子ども・その配偶者	37.0%
	③ 親・兄弟姉妹	22.3%	③ 親・兄弟姉妹	20.9%
身辺看護	① 配偶者	59.5%	① 子ども・その配偶者	60.1%
	② 子ども・その配偶者	46.0%	② 配偶者	36.3%
	③ 親・兄弟姉妹	25.3%	③ 親・兄弟姉妹	25.9%
身辺介護	① 配偶者	70.5%	① 子ども・その配偶者	58.7%
	② 子ども・その配偶者	38.7%	② 配偶者	40.8%
	③ 専門家やサービス機関	21.6%	③ 専門家やサービス機関	29.8%

表6 情緒的サポート (ア)問題を抱えて、落ち込み、混乱したとき

		*** **		** **		* **		* **		* **		* **		* **				
		配偶者	親・兄弟姉妹	子ども・その配偶者	その他の親族	友人や職場の同僚	近所(地域)の人	専門家やサービス機関	誰もいない									
単身世帯	年齢 53-57歳 度数	26	1	13	14	20	7	26	1	21	6	25	2	27	0	23	4	
		年齢(%)	13.4%	0.5%	6.7%	7.2%	10.3%	3.6%	13.4%	0.5%	10.8%	3.1%	12.9%	1.0%	13.9%	0.0%	11.9%	2.1%
	刻み) 58-62歳 度数	27	2	19	10	18	11	28	1	20	9	28	1	28	1	27	2	
		年齢(%)	13.9%	1.0%	9.8%	5.2%	9.3%	5.7%	14.4%	0.5%	10.3%	4.6%	14.4%	0.5%	14.4%	0.5%	13.9%	1.0%
	63-67歳 度数	40	0	20	20	27	13	40	0	35	5	38	2	37	3	36	4	
		年齢(%)	20.6%	0.0%	10.3%	10.3%	13.9%	6.7%	20.6%	0.0%	18.0%	2.6%	19.6%	1.0%	19.1%	1.6%	18.6%	2.1%
	68-72歳 度数	48	1	38	11	26	23	49	0	42	7	48	1	45	4	38	11	
		年齢(%)	24.7%	0.5%	19.6%	5.7%	13.4%	11.9%	25.3%	0.0%	21.7%	3.6%	24.7%	0.5%	23.2%	2.1%	19.6%	5.7%
	73-77歳 度数	49	0	37	12	22	27	44	5	43	6	43	6	44	5	47	2	
		年齢(%)	25.3%	0.0%	19.1%	6.2%	11.3%	13.9%	22.7%	2.6%	22.2%	3.1%	22.2%	3.1%	22.7%	2.6%	24.2%	1.0%
	合計	度数	190	4	127	67	113	81	187	7	161	33	182	12	181	13	171	23
		年齢(%)	97.9%	2.1%	65.5%	34.5%	58.3%	41.8%	96.4%	3.6%	83.0%	17.0%	93.8%	6.2%	93.3%	6.7%	88.1%	11.9%
夫婦世帯	年齢 53-57歳 度数	39	134	134	39	134	39	166	7	139	34	163	10	163	10	165	8	
		年齢(%)	3.6%	12.2%	12.2%	3.6%	12.2%	3.6%	15.1%	0.6%	12.7%	3.1%	14.9%	0.9%	14.9%	0.9%	15.0%	0.7%
	刻み) 58-62歳 度数	48	187	183	52	183	52	224	11	206	29	225	10	223	12	230	5	
		年齢(%)	4.4%	17.1%	16.7%	4.7%	16.7%	4.7%	20.4%	1.0%	18.8%	2.6%	20.5%	0.9%	20.3%	1.1%	21.0%	0.5%
	63-67歳 度数	54	221	233	42	213	62	272	3	261	14	274	1	266	9	265	10	
		年齢(%)	4.9%	20.2%	21.2%	3.8%	19.4%	5.7%	24.8%	0.3%	23.8%	1.3%	25.0%	0.1%	24.3%	0.8%	24.2%	0.9%
	68-72歳 度数	53	200	206	47	166	87	246	7	242	11	248	5	240	13	246	7	
		年齢(%)	4.8%	18.2%	18.8%	4.3%	15.1%	7.9%	22.4%	0.6%	22.1%	1.0%	22.6%	0.5%	21.9%	1.2%	22.4%	0.6%
	73-77歳 度数	42	119	141	20	107	54	159	2	154	7	158	3	158	3	152	9	
		年齢(%)	3.8%	10.9%	12.9%	1.8%	9.8%	4.9%	14.5%	0.2%	14.0%	0.6%	14.4%	0.3%	14.4%	0.3%	13.9%	0.8%
	合計	度数	236	861	897	200	803	294	1067	30	1002	95	1068	29	1050	47	1058	39
		年齢(%)	21.5%	78.5%	81.8%	18.2%	73.2%	26.8%	97.3%	2.7%	91.3%	8.7%	97.4%	2.6%	95.7%	4.3%	96.4%	3.6%

注) χ²検定結果→ ***p<0.05, **p<0.01, *p<0.001

4. 世帯類型・コーホートにおける老親扶養構造の特徴

ここでは、まず世帯類型（単身世帯・夫婦世帯）による援助源の特徴を明らかにするために、(ア)～(エ)ような問題が生じたとき、どのような援助源を選択するかについて、 χ^2 検定の結果に基づき分析を試みることにする。さらには、中高年齢者と高齢者のコーホートを比較しながら、援助源の特徴を明らかにするとともに、それらの分析結果から、それぞれの考察を加えたい【表6～表10参照】。

(1) 情緒的サポートの援助源についての結果と考察

「情緒的サポート」のそれぞれの援助源について全体的に概観すると、単身世帯の場合「子ども・その配偶者」（41.8%）、「親・兄弟姉妹」（34.5%）、「友人や職場の同僚」（17.0%）、夫婦世帯の場合「配偶者」（78.5%）、「子ども・その配偶者」（26.8%）、「親・兄弟姉妹」（18.2%）等の援助源を有選択する中高年齢者が多い傾向を示している【表6参照】。

次に、 χ^2 検定の結果から単身・夫婦世帯それぞれについてのコーホートとの関連性を検討すると、単身世帯の場合「親・兄弟姉妹」の援助源に、夫婦世帯の場合「親・兄弟姉妹」、「子ども・その配偶者」、「友人や職場の同僚」、「近所（地域）の人」の援助源に有意差が認められた。

さらに、0.1%水準を中心に分析を加えてみると、単身世帯の情緒的サポートについては、特に有意差は認められなかった。一方、夫婦世帯の情緒的サポートについてコーホート別の分析を加えてみると、「53歳～57歳」（3.6%）、「58～62歳」（4.7%）、「63～67歳」（5.7%）、「68～72歳」（7.9%）と高齢者コーホートになるほど「子ども・その配偶者」を選択する割合が高くなっているが、「73～77歳」（4.9%）では、「子ども・その配偶者」を選択する割合が低くなっている。また、「53歳～57歳」（3.1%）、「58～62歳」（2.6%）、「63～67歳」（1.3%）、「68～72歳」（1.0%）、「73～77歳」（0.6%）と高齢者コーホートになるほど「友人や職場の同僚」を選択する割合が低くなっている。

これらの結果から、情緒的サポートの援助源の特徴をまとめてみると、単身世帯は「子ども・その配偶者」、「親・兄弟姉妹」4割、「友人や職場の同僚」2割と子ども家族や親・兄弟姉妹を頼りにする傾向がみられ、夫婦世帯は「配偶者」8割、「子ども・その配偶者」3割、「親・兄弟姉妹」2割といったように配偶者依存の傾向が読みとれる【表10参照】。 χ^2 検定の結果から世帯類型・コーホートとの関連性の特徴をまとめてみると、単身世帯の場合、0.1%水準の有意差は認められなかったが、「親・兄弟姉妹」の援助源に1%水準の有意差が認められた。また、夫婦世帯の場合は、中高年齢者コーホートから高齢者コーホートへ移行するにつれて「子ども・その配偶者」を援助源として選択する割合が

高くなり、一方で「友人や職場の同僚」を選択する割合が低くなっている。

以上の結果から、単身世帯・夫婦世帯への情緒的サポートと援助源について考察をしてみると、単身世帯の場合は夫婦世帯に比べて、配偶者を代替する子ども家族、親・兄弟姉妹、友人等が重要な役割を担っている。しかし、加齢とともに身体的機能が低下し、または仲のよい友人の死により、直接的かつ円滑的な関係が徐々に結ばなくなることが予想できる。また、年々増えつつある単身世帯の中でも、特に後期高齢者についての情緒的な対応は、今後ますます深刻化して行くであろう。一方、夫婦世帯の場合は、大半が配偶者を情緒的サポートの援助源として位置付けており、配偶者依存の傾向にある。しかし、高齢者夫婦の場合は、加齢とともに配偶者の要介護化、死別等が予測できることから、将来的には身近な地域社会を拠点とした公的な支援の役割は欠かせないものとなる。そして今後は、家族の代替機能としての地域的なサポートネットワークの重要性が課題となるであろう。

(2) 経済的サポートの援助源についての結果と考察

「経済的サポート」のそれぞれの援助源について全体的に概観すると、単身世帯の場合「子ども・その配偶者」(40.6%)、「親・兄弟姉妹」(21.9%)、「誰もいない」(20.9%)、「専門家やサービス機関」(12.8%)、夫婦世帯の場合「配偶者」(51.7%)、「子ども・その配偶者」(28.9%)、「親・兄弟姉妹」(18.7%)、「専門家やサービス機関」(13.0%)等の援助源を有選択する中高年齢者が多い傾向を示している【表7参照】。

次に、 χ^2 検定の結果から単身・夫婦世帯それぞれについてのコーホートとの関連性を検討すると、単身世帯の場合「親・兄弟姉妹」の援助源に、夫婦世帯の場合「配偶者」、「親・兄弟姉妹」、「子ども・その配偶者」の援助源に有意差が認められた。

さらに、0.1%水準を中心に分析を加えてみると、単身世帯の情緒的サポートについては、特に有意差は認められなかった。一方、夫婦世帯の経済的サポートでは、「親・兄弟姉妹」、「子ども・その配偶者」の援助源に有意差が認められた。それぞれのコーホート別の分析を加えてみると、「53歳～57歳」(4.3%)、「58～62歳」(5.6%)の中高齢者コーホートでは、「親・兄弟姉妹」の援助源で、「63歳～67歳」(7.4%)、「68～72歳」(7.9%)の高齢者コーホートでは、「子ども・その配偶者」の援助源を選択する割合が高くなっている。

これらの結果から、経済的サポートの援助源の特徴をまとめてみると、単身世帯は「子ども・その配偶者」4割、「親・兄弟姉妹」、「誰もいない」2割と子ども家族に依存する傾向がみられ、夫婦世帯は「配偶者」5割、「子ども・その配偶者」3割「親・兄弟姉妹」2割と大半が配偶者に依存する傾向にある【表10参照】。 χ^2 検定の結果から世帯類型

・コーホートとの関連性の特徴をまとめてみると、単身世帯の場合、0.1%水準の有意差は認められなかったが、「親・兄弟姉妹」の援助源に1%水準の有意差が認められた。また、夫婦世帯の場合は、高齢者コーホートで「子ども・その配偶者」の援助源を選択する割合が高くなっている。

以上の結果から、単身世帯・夫婦世帯への経済的サポートと援助源について考察をしてみると、単身世帯の場合は、配偶者を代替する子ども家族、親・兄弟姉妹等が重要な役割を担っている。しかし、子ども家族の経済的状況や子ども家族との家族関係の不和を考えると、必ずしも子ども家族が援助源となるとはいえないだろう。また、親・兄弟姉妹からの経済的サポートも同様に、自分自身の加齢とともに、親も兄弟姉妹も確実に年老いて行くことが予想できる。年々増えつつある単身世帯の中でも、特に低所得層、家族から孤立した単身高齢者についての経済的サポートの問題は、今後ますます深刻化して行くであろう。一方、夫婦世帯の場合は、配偶者や子ども家族を経済的サポートの援助源とする傾向にある。しかし、夫婦世帯の場合は、加齢とともに配偶者の要介護化、死別等が予測できることから、将来的には子ども家族や親・兄弟姉妹へと援助源が移行して行くことが想定できる。そうした場合、単身高齢者と同様な問題と課題が生じてくるであろう。

(3) 身辺看護の援助源についての結果と考察

「身辺看護」のそれぞれの援助源について全体的に概観すると、単身世帯の場合「子ども・その配偶者」(48.5%)、「親・兄弟姉妹」(24.7%)、「専門家やサービス機関」(17.0%)、「誰もいない」(10.3%)、夫婦世帯の場合「配偶者」(56.0%)、「子ども・その配偶者」(51.4%)、「親・兄弟姉妹」(21.1%)、「専門家やサービス機関」(11.9%)等の援助源を有選択する中高年齢者が多い傾向を示している【表8参照】。

次に、 χ^2 検定の結果から単身・夫婦世帯それぞれについてのコーホートとの関連性を検討すると、単身世帯の場合「親・兄弟姉妹」の援助源に、夫婦世帯の場合「親・兄弟姉妹」、「子ども・その配偶者」、「友人や職場の同僚」、「近所(地域)の人」の援助源に有意差が認められた。

さらに、0.1%水準を中心に分析を加えてみると、単身世帯の情緒的サポートについては、特に有意差は認められなかった。一方、夫婦世帯の身辺看護については、「親・兄弟姉妹」、「友人や職場の同僚」の援助源に有意差が認められた。それぞれのコーホート別の分析を加えてみると、「53歳～57歳」(4.9%)、「58～62歳」(6.3%)の中高年齢者コーホートでは、「親・兄弟姉妹」を選択する割合が高くなっている。また、「53歳～57歳」(1.5%)、「58～62歳」(1.0%)、「63～67歳」(0.5%)、「68～72歳」(0.4%)、「73～77歳」(0.2%)と高齢者コーホートになるほど「友人や職場の同僚」の援助源を選択する割合が低くなっている。

これらの結果から、身近看護の援助源の特徴をまとめてみると 単身世帯は「子ども・その配偶者」5割、「親・兄弟姉妹」、「専門家やサービス機関」2割と子ども家族へ依存する傾向がみられ、夫婦世帯は「配偶者」6割、「子ども・その配偶者」5割、「親・兄弟姉妹」2割と配偶者と子ども家族へ依存する傾向がみられる【表10参照】。 χ^2 検定の結果から世帯類型・コーホートとの関連性の特徴をまとめてみると、単身世帯の場合、0.1%水準の有意差は認められなかったが、「親・兄弟姉妹」の援助源に1%水準の有意差が認められた。また、夫婦世帯の場合は、中高年齢者コーホートから高齢者コーホートへ移行するにつれて、「友人や職場の同僚」の援助源を選択する割合が低くなっている。

以上の結果から、単身世帯・夫婦世帯への身近看護と援助源について考察をしてみると、単身世帯の場合は、配偶者を代替する子ども家族が半数を占めて重要な役割を担っている。しかし、子どもがいない、子どもが近くに住んでいない、子ども家族との家族関係が良くない場合を考えてみると、必ずしも確実に子ども家族が援助源となるとはいえないだろう。一方、夫婦世帯の場合は、配偶者を身近看護の援助源とする傾向にあるが、加齢とともに配偶者の要介護化、死別等が予測できることから、そうした場合、子ども家族や親・兄弟姉妹へと援助源が移行して行く可能性が高く、将来的には単身高齢者と同様な問題と課題が生じてくるであろう。

(4) 身近介護のリソースについての結果と考察

「身近介護」のそれぞれの援助源について全体的に概観すると、単身世帯の場合「子ども・その配偶者」(43.2%)、「専門家やサービス機関」(38.1%)、「親・兄弟姉妹」(14.7%)、「誰もいない」(13.2%)、夫婦世帯の場合「配偶者」(65.5%)、「子ども・その配偶者」(42.7%)、「専門家やサービス機関」(26.6%)、「親・兄弟姉妹」(10.3%)等の援助源を有選択する中高年齢者が多い傾向を示している【表9参照】。

次に、 χ^2 検定の結果から単身・夫婦世帯それぞれについてのコーホートとの関連性を検討すると、単身世帯の援助源には、特に有意差が認められなかった。一方、夫婦世帯では、「親・兄弟姉妹」の援助源に1%水準、「子ども・その配偶者」の援助源に5%水準に有意差が認められた。

これらの結果から、身近介護の援助源の特徴をまとめてみると 単身世帯の場合は、「子ども・その配偶者」、「専門家やサービス機関」4割、「親・兄弟姉妹」と子ども家族とサービス機関等の外部機能を選択する割合が高く、夫婦世帯の場合は、「配偶者」7割、「子ども・その配偶者」4割、「専門家やサービス機関」3割と単身世帯に比べて圧倒的に配偶者や子ども家族等の内部機能を選択する割合が高い傾向にある【表10参照】。 χ^2 検定の結果から世帯類型・コーホートとの関連性の特徴をまとめてみると、単身世帯の援助源には、特に有意差が認められなかった。一方、夫婦世帯は「親・兄弟姉妹」、「子

ども・その配偶者」の援助源に1%又は5%水準の有意差が認められた。

以上の結果から、単身世帯・夫婦世帯への身辺介護と援助源について考察をしてみると、単身世帯の場合は、子ども家族と社会的な支援といった幅広い選択肢をあげているのに対して、夫婦世帯の場合は、配偶者や子ども家族に依存的な傾向がみられる。しかし、いずれにせよ両者には、身体的ADLの低下に伴う要介護高齢者の介護問題や彼らを介護する家族の問題が窺える。今後は、こうした身辺介護をめぐる要介護高齢者と家族との関係を十分に踏まえた上で、介護保険を中心とした高齢者福祉政策のあり方をさらに考えて行く必要性があると考えられる。

表10 中高年齢者単身・夫婦世帯のサポートと援助源

項目	単身世帯・援助源	割合	夫婦世帯・援助源	割合
情緒的 サポート	①子ども・その配偶者	41.8%	①配偶者	78.5%
	②親・兄弟姉妹	34.5%	②子ども・その配偶者	26.8%
	③友人や職場の同僚	17.0%	③親・兄弟姉妹	18.2%
経済的 サポート	①子ども・その配偶者	40.6%	①配偶者	51.7%
	②親・兄弟姉妹	21.9%	②子ども・その配偶者	28.9%
	③誰もいない	20.9%	③親・兄弟姉妹	18.7%
身辺看護	①子ども・その配偶者	48.5%	①配偶者	56.0%
	②親・兄弟姉妹	24.7%	②子ども・その配偶者	51.4%
	③専門家やサービス機関	17.0%	③親・兄弟姉妹	21.1%
身辺介護	①子ども・その配偶者	43.2%	①配偶者	65.5%
	②専門家やサービス機関	38.1%	②子ども・その配偶者	42.7%
	③親・兄弟姉妹	14.7%	③専門家やサービス機関	26.6%

おわりに

ここでは、今回検討を行なった高齢者世帯の現状と老親扶養にみられる特徴と課題をまとめることにしたい。

まず第1に、人口学的な動向からは、高齢者夫婦世帯並びに単身世帯の増加によって、世帯規模が縮小化傾向にあることが明らかになった。このように、今後は子どもと別居しながら夫婦だけで生活する高齢者夫婦世帯や、未婚または配偶者の離死別により単身生活を送る高齢者単身世帯に注目した研究の必要性があると考えられる。

第2に、今回分析を行なった全国調査の結果から老親扶養の特徴をまとめてみると、森岡（1997年）が述べているように、高齢者の情緒的サポートは、近親や親友、配偶者との死別を契機に子どもなどへの依存に傾くようである。また、高齢者の加齢やADLの低下などは、経済欲求を独力で充足することを困難にするために、高齢者にとって経済的サポートは不可欠である。さらに、身辺看護と身辺介護についてみると、高齢者の加齢や日常

- ・ 生活の行動能力の衰え等は、身体欲求充足のために、子どもなど他者への依存を深めることが明らかになった。

第3に、高齢者単身・夫婦世帯に関する老親扶養をとりあげてみると、高齢者の情緒的サポートは、近親や親友、配偶者との死別を契機に子どもなどへの依存に傾くようである。このことは、単身高齢者や高齢者夫婦に限らず、高齢者全体に関わる特徴である。しかし、単身高齢者は他の高齢者に比べて、子どもと同居していなかったり、配偶者もない場合、身近に心の支えとなる家族がないことになる。こうした単身高齢者のようなケースに対応するには、家族の代替機能としての地域的なサポートネットワークの重要性が今後の課題となるであろう。次に、高齢者の加齢やADLの低下などは、経済欲求を独力で充足することを困難にする。これは、高齢者全体に共通する特徴といえるが、高齢者単身・夫婦世帯の経済的サポートと援助源を分析してみると、夫婦世帯に比べて単身世帯の方が、配偶者がいないために子ども家族に依存する傾向が明らかになった。今後は、こうした経済的自立の困難な単身高齢者の実態を明らかにし、彼らの住宅や経済事情などを念頭に置いた安心して住みやすい住環境整備や公的な年金、介護保険、社会的なサポートシステム化を検討して行く必要があるだろう。さらに、高齢者の加齢や日常生活の行動能力の衰え等は、身体欲求充足のために、子どもなど他者への依存を深めることが明らかになった。しかし、高齢者夫婦より単身高齢者の方が、子ども家族に看護や介護を頼みたいと答えていながら、子どもや家族以外の社会的な支援といった幅広い選択肢をあげていることは、家族による看護や介護の難しさを特徴づけていると考えられる。今後は、こうした身近看護や身近介護をめぐる要介護高齢者と家族との関係を十分に踏まえた上で、介護保険を中心とした高齢者福祉政策のあり方をさらに考えて行く必要があるように思われる。

さらには、高齢者の価値欲求をできるだけ保持させるためにも、身近な地域社会を拠点とした地域活動や公的な支援の充実化が必要不可欠であるといえよう。

注

- (1) 厚生統計協会編, 2000, 『国民の福祉の動向』 47(12), 厚生統計協会, 5-6.
- (2) 国立社会保障・人口問題研究所, 1998, 「日本の世帯数の将来推計(全国推計)」, 国立社会保障・人口問題研究所.
- (3) 横山博子, 1997, 「老年期の家族」, 柴田博・芳賀博・長田久雄・古谷野亘編著『老年学入門』, 川島書店, 195-199.
- (4) 森岡清美, 1997, 「老親の扶養」, 森岡清美・望月嵩共著『新しい家族社会学(四訂版)』, 培風館, 136-138.
- (5) 三浦文夫編, 2000, 『図説 高齢者白書 2000』, 全国社会福祉協議会, 16-32.

参考文献

- 安達正嗣, 1999, 『高齢期家族の社会学』, 世界思想社.
- 藤崎宏子, 1998, 『高齢者・家族・社会的ネットワーク』, 培風館.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 1998, 「日本の世帯数の将来推計（全国推計）」, 国立社会保障・人口問題研究所.
- 厚生統計協会編, 2000, 『国民の福祉の動向』47(12), 厚生統計協会.
- 高齢者保健研究会編, 1998, 『高齢者の保健福祉に関する総合的調査研究報告書』, 長寿社会開発センター.
- 小山隆, 1997, 「老親扶養の現実－同居を中心として」, 『現代の家族』（ジュリスト増刊総合特集）8, 有斐閣.
- 三浦文夫編, 2000, 『図説 高齢者白書 2000』, 全国社会福祉協議会.
- 森岡清美, 1993, 『現代家族変動論』, ミネルヴァ書房.
- 森岡清美, 1997, 「老親の扶養」, 森岡清美・望月嵩共著『新しい家族社会学（四訂版）』, 培風館.
- 直井道子, 1993, 『高齢者と家族 新しいつながりを求めて』, サイエンス社.
- 那須宗一・湯沢雍彦編, 1970, 『老人扶養の研究』, 垣内出版.
- 那須宗一・増田光吉編, 1972, 『老人と家族の社会学』, 垣内出版.
- 岡村清子・長谷川倫子編, 1997, 『エイジングの社会学』, 日本評論社.
- 清水浩昭, 1996, 「高齢者と家族－高齢者扶養問題との関連で」, 『TR I - V I E W』112, 東急総合研究所.
- 清水浩昭, 1998, 「世代間関係に関する一考察－高齢者扶養問題との関連で」, 清水浩昭・芳賀正明・松本誠一編『性と年齢の人類学』, 岩田書院.
- 杉岡直人, 1994, 「一人暮らしの高齢者の社会関係に関する家族社会学的研究」, 『北星学園大学文学部北星論集』31, 北星学園大学.
- 染谷淑子編, 2000, 『老いと家族 変貌する高齢者と家族』, ミネルヴァ書房.
- 総務庁長官官房高齢社会対策室編, 1998, 「中高年齢層の高齢化問題に関する意識調査結果」, 総務庁長官官房高齢社会対策室.
- 総務庁長官官房高齢社会対策室編, 2000, 「高齢者一人暮らし・夫婦世帯に関する調査」, 総務庁長官官房高齢社会対策室.
- 戸田貞三, 1937, 『家族構成』, 弘文堂.
- 山本千鶴子, 1993, 「単身生活者の動向－1980年および1990年の比較－」, 『人口問題研究』49-3, 厚生省人口問題研究所.
- 横山博子, 1997年, 「老年期の家族」, 柴田博・芳賀博・長田久雄・古谷野亘編著『老年学入門』, 川島書店.

(2001年5月5日提出)

文部省科学研究費基盤研究（A）：10301010

家族生活についての全国調査（NFR98）報告書 No. 2-6

現代家族におけるサポート関係と高齢者介護

Support Resources and Care for the Aged of the Contemporary Family

石原邦雄・大久保孝治 編

2001年9月

日本家族社会学会
全国家族調査（NFR）研究会